

「仲介」する出島 —*The Thousand Autumns of Jacob de Zoet*に おけるリアリズムとポストコロニアリズム

Mediating Dejima: Realism and Postcolonialism in
The Thousand Autumns of Jacob de Zoet

平 林 美都子

HIRABAYASHI Mitoko

キーワード：David Mitchell, *The Thousand Autumns of Jacob de Zoet*, リアリズム、ポストコロニアリズム、仲介

デイヴィッド・ミッチェルの『ヤコブ・デズートの千の秋』（2010、邦訳『出島の千の秋』）は1799年から1800年までの出島オランダ商館を舞台にした、五部構成の小説である。この小説では、一部から三部までが各13章仕立てになっており、1811年と1817年を扱った短い二部がコーダ風に付け加えられている。ミッチェルは年月日や場所を特定したいわゆる「歴史小説」ジャンルを手掛けたことについて、これが『千の秋』を書くことができる唯一の形式だと語っている¹。果たしてミッチェルは、この作品で歴史的リアリズム小説を目指したのだろうか。マライア・ベヴィルは『クラウド・アトラス』と『千の秋』の歴史的事象に向けた作者の意識の違いに注目し、後者にはポストモダンの手法からの脱却が見られると指摘する。ベヴィルは『千の秋』には「経験や主観に根ざした『真実』を並置させることで過去を不安定にさせる」ような歴史的メタフィクションの要素があることを認めた上で、「個人的体験や主観的語りの信頼性がある」として、ポストモダンを超えていると論じる（Bevill 11）。「主観的な語り」に加えて「他者性」「他者に声を与える」（Bevill 11）ことへのベヴィルの言及は、『千の秋』にポストコロニアリズムの側面があることを示唆している。リアリズム仕立てになっているものの、本作品にはナショナリズムや支配的権力の正当性を批判するポストコロニアル的視点が確かに存在するのである²。

マシュー・レノルズは『千の秋』では異文化関係の困難さが焦点になっていると論じる（Reynolds 頁なし）。様々な国・人種の人間が集う出島は他者との交流に通訳・翻訳が不可欠な空間だった。とはいえ、翻訳が言葉を置き換えるという中立的な行為ではなく、政治的、文化的、言語的な問題を孕んでいることを考えれば、『千の秋』そのものが「翻訳」行為に内在するポストコロニアル的問題を持つ小説だといってもよいだろう。この作品中には確かに文化の混淆、ポリフォニックな語り、主従関係などのポストコロニアル的要素が散見できる。また通訳・翻訳以外にも異文化交流に必要とされる様々な仲介行為も見えてとることができる。さら

には、小説世界の話はオランダ語か日本語で進んでいるはずなのに、作品自体は英語が仲介している小説であり、読むことに意識的な読者にとっては内容と言語との間に不思議な乖離を感じるだろう。本稿では史実というリアリズムの側面とポストコロニアリズムの側面がどのように融合していくのかを見ていこうと思う。具体的には、様々な仲介行為がどのような機能を果たし小説の主要テーマとなっていくのかを考察し、出島が仲介のトポスとなっていること、そして英語が果たす仲介の意味を読み解きながら、作品のポストコロニアル性を明らかにしたい³。

リアリズム小説として

歴史小説と呼ばれる『千の秋』がいかに歴史を辿っているのかを見る前に、小説の概要を紹介しておこう。

1799年7月、オランダ商館の事務員としてヤコブ・デズートが出島にやってきた。当時のオランダ貿易は、一年に一度バタヴィア（現在のジャカルタ）のオランダ東インド会社⁴から砂糖などを積んだ貿易船が出島へやってきて、主として日本の銅を積んで帰っていくものだった。ヤコブはオランダに残してきた恋人と結婚するため、日本に滞在する5年間に彼女の父親を納得させるだけの財産を作るつもりだった。新館長フォルステンボースは到着早々、出島貿易で私腹を肥やしてきた過去の駐在員らの不正取引を洗い出す仕事をヤコブに命じた。出島の医師マリヌスの元には西洋医術を学ぶため日本人医学生がやってきたが、そこに混じっていた唯一の女性が、幼少期の火傷跡の痣が左頬に残るアイバガワオリトだった。長崎奉行シロヤマの愛妾の難産に立ち会った産婆のオリトは、無事に男児を取り上げたことを評価され、女でありながら特別に出島への出入りが許されていたのである。そんな彼女にヤコブは惹かれていく。彼は通詞のオガワウザエモンを通じて自分の思いを託すが、オリトは亡父の借財のため、不知火山の僧院へ無理やり連れていかれてしまった。謎に包まれたその僧院は、奉行を上回るほどの権力を持つエノモト僧正によって支配されていた。

僧院から一人の僧が脱出した。彼が命を賭して巻物に書き写した僧院の秘密教義とは、尼僧の役目は子産みであり、生まれた赤子は不老不死の薬となる血を抜かれて殺されるというおぞましい内容だった。20年間の勤めを果たした後の尼僧も、約束の自由と年金が得られるどころか、下山直後に殺されることになっていた⁵。この巻物は薬草売りのタネからウザエモンへ、そして最後にヤコブの元に届く。実はウザエモンもオリトへ思いを寄せており、彼女の救出を企てるが、仲間の裏切りに会いエノモトに殺されてしまう。

ヤコブが半年がかりで巻物を翻訳し終わった頃、イギリス艦フィーバス号がオランダ国旗を掲げて長崎港に侵入する事件が起こった。イギリスが出島へ砲撃する中、ヤコブはマリヌスとともに物見やぐらにとどまり続けた。最終的にイギリス船は退去したが、海岸警備を怠ったことでシロヤマ奉行は責任を取らされることになった。ヤコブから渡された巻物によってエノモトの悪行を知った奉行は、彼を道連れに毒薬で死ぬ。それから10年後、マリヌス医師の葬儀

にヤコブはオリトと再会する。さらに7年後の1817年、18年間の出島暮らしを終えたヤコブはオランダへと戻っていく。

ミッチェルが『千の秋』のアイデアを得たきっかけは、長崎を旅した1994年に遡る。彼はその年のクリスマス、停留場を間違えて電車を降りてしまい、偶然訪れた出島でその歴史を知ることになった⁶。しかし彼が実際に『千の秋』の執筆に着手するまでには、それからかなりの年月が必要だったようだ。この小説の謝辞には、ドイツ人のエンゲルベルト・ケンペル(1651-1716)の『日本史』(1712)とオランダ人ヘンドリック・ドゥーフ(1777-1835)の『日本回想録』(1833)が挙げられている。ケンペルが出島商館付き医者として滞在したのは1690年から1693年である。彼の『日本史』英語訳は1727年に出版されていたが⁷、1999年にはベアトリス・ボダルト・ベイリーによる注釈付きの翻訳が新たに出版された。オランダ語の『日本回想録』に関しては、2003年、ドゥーフの子孫のアニク・M・ドゥーフによって英語訳が出版された。ミッチェルが出島から得たインスピレーションを歴史小説という形にするためにこれらの書物は必要不可欠であったはずだ。出島に足を踏み入れてから『千の秋』執筆に至るまで年月を要した大きな理由は、こうした資料の入手だったのであろう。

クレア・ラルソネールが『千の秋』の歴史的ソースを明らかにしている通り、ヤコブ・デズートの原形は1799年から1817年までオランダ商館に滞在したヘンドリック・ドゥーフであるのは間違いない(Larsonneur, 2015)。また、商館付き医師でありながら日本の植物を研究するマリヌスは、滞在時期は多少ずれるものの、フランツ・シーボルト(1796-1866, 出島滞在期間1823-28)をモデルにしている。マリヌス医師のところへ西洋医学を学びに来るオリトは、ラルソネールの指摘にあるように、シーボルトと遊女との間に生まれた一人娘オイネが念頭にあったのかもしれない(Larsonneur, 2015, 137-138)。

その他にモデルにされた史実は、オランダ国旗を掲げて長崎に入港したイギリス艦フェートン号事件(1808)である。ドゥーフが語る事件では、イギリスの交渉人は元オランダ商館長であり、当時の商館員二人を人質にとってオランダ商館をイギリスへ引き渡すように要求してきた。イギリスが強気な姿勢を取った理由としては、フランスに併合されたオランダがすでに国家機能を失い、オランダ貿易の本拠地ジャワも防衛のためイギリス保護下に置かれたという背景があったからだ(ドゥーフ 149-50)。フェートン号はドゥーフの交渉により、最終的に食料と飲料の補給を受けて去っていった。当時の長崎奉行、松平康英は責任上自害したが、フェートン号の退去はドゥーフの交渉術に拠るところが大きかった。一方、小説中のフィーバス号事件(1800)の概要はフェートン号事件をなぞっているものの、その退去の理由は日本人にとってもヤコブら商館員にとっても大きな謎であった。しかし、史実とは異なり、イギリス艦長ペンハリガン的心情が彼自身の語りによって読者だけに明かされることは、本稿で扱う『千の秋』のテーマに通じる重要な意味を担うことになっている。これについては後に考察したい。

主従関係が逆転する空間

17世紀、オランダ東インド会社はバタヴィア（ジャカルタ）に本拠地を置き、アジアでの交易や植民を行なった。帝国主義の先鋒に立っていた当時のオランダが、国力だけでなく科学技術などの学術分野において日本よりはるかに進んでいたのは言うまでなかった。日本はオランダの植民地にこそならなかったが、他のアジア地域と同様、西洋に対する東洋、すなわち先進国に対する後進国という明確な力関係の下に置かれることが予測されていた。しかし実態はそうではなかった。

鎖国下の江戸時代の日本人は、ウザエモンの言葉にあるようにまさに「囚人」(92)であり、出ることまた一旦出れば戻ることでもできず、日本国内に幽閉されていた。こうした鎖国日本の縮図が、南側の接岸線233メートル、北側193メートル、奥行き70メートルという四千坪しかない出島だったといえよう。ところがこの人工島に幽閉されていたのは日本人ではなく、オランダ人だった⁸。西洋と東洋の力関係から想定される常識は、この島では通用しなかったのである。出島へ^{ひとたび}一度上陸したら、次の船が来るまで本国のオランダへはおろか、ジャカルタへも戻ることができなかった。しかも、長崎本土とつながる短い橋も門は常時閉鎖されており、自由に入出入りはできなかった。もちろん、オランダ人が本土に渡れないだけでなく、日本人の出島への出入りも制限されていた。日用品を売る商人や洗濯女などを除けば、出島に入れるのは通詞（通訳）や乙名（監督）、出島妻（女郎）に限られており、オランダ商館員らは日本人との無用な接触が禁止されていた。しかもオランダ人は日本語を学ぶことすら禁止されていたのである。彼らが出島に上陸するときにはまず持ち物検査を受けた。聖書や十字架などのキリスト教関連の物は持ち込み禁止であった。その上、牢獄の囚人のごとく、定時に点呼がなされて居住者全員の所在の確認が行われる毎日であった。つまり出島は、西洋と東洋という当時の力関係（主従関係）が逆転した空間だったのである。

日本におけるオランダ貿易の拠点、出島は、西洋との力関係を最初から問い質す空間であった。この空間でコロニアリズムという関係性を相対化する人物はマリヌス医師である。彼は奴隷のエーラトゥーを自分の「医療助手」とし、人格を持つ人間として扱う。また奴隷のシャコの鬱状態については、「7年間働けば自由人として家族の元へ帰す」という前商館長の約束を反故にされ、絶望の余り心を病んでいると診断し、一人の人間としてシャコの状況を弁護する(142-43)。一方で、オリトに惹かれるヤコブから彼女と話す機会を作ってくれるように頼まれたときには、「『東洋の女』という種類にのぼせ上っているだけだよ。そうだ、神秘的な瞳、髪の椿、見た目の控えめなところにだ」(64)と言って、ヤコブの恋心がオリエンタリズムから生じたものではないのかと批判している。マリヌスのこうした言動は、会社の所有物とされる奴隷や性の対象物として扱われる女郎や出島妻の実態への異議申し立てだといえよう。

出島の幽閉状況の相似形として不知火山の僧院がある。人種差別や階級差別が堂々とまかり通る出島に対し、僧院での性差別は言葉巧みな論理ですり抜けられている。毎日の薬物投与によって判断力、思考力を停止させられた尼僧たちは、僧との性行為と出産を女神が与える使命

だと感謝し、生まれる赤子を「賜物」(gift) だと呼ぶ。マーガレット・アトウッドの『侍女の物語』を彷彿させるような女のディストピア空間に住む尼僧らの中で、真向から支配者を批判するのはオリトである。毎夜飲まされる薬物を断ち切って判断力を取り戻した彼女は、僧院からの脱出に挑むが、同輩のヤヨイの難産を知らせる鐘を聞くとそれに対処するため、自らの意志で僧院に戻っていく。しかし今回のオリトには切り札があった。脱出の経路を探す最中、彼女は僧院の秘密——尼僧の産んだ子どもからの手紙が偽造であること——を知ったことである。彼女は秘密を明かさないと条件に、生殖の道具にされることなく、産婆として留まる権利を得た。言い換えれば、秘密を知ることによって力を得たオリトは、もはや監視・管理されない存在となったのである。

仲介行為

この小説では様々な人間が様々な場面で様々な交流をする。そこには仲介または斡旋の行為が存在する。まずは出島内の状況を考えてみたい。出島には東インド会社からのオランダ人のみならず、ドイツ人やマレー人やアイルランド人、そして交易相手の日本人も加わり、まさに多言語、多文化が共存する空間だった。通訳が日常生活に欠かせない行為だったのは当然である。さらに登場人物の幾人かは、実際に翻訳にも関わっている。例えばエノモト僧正は長崎の蘭学塾シラントウ堂に所属する学者でもあり、アイザック・ニュートンを翻訳したことになっている(318)。通詞のウザエモンは、アダム・スミスの『国富論』のオランダ語版を日本語へと翻訳中だった(29)。実在した歴史人物である杉田玄白も登場し、解剖学書『ターヘル・アナトミア』を翻訳し、『解体新書』として著わしたことも描かれている。物語の後半になると、ウザエモンから巻物を預かったヤコブが、エノモトの教団の教義内容を知るため、そこに書かれた日本語を半年がかりで訳している。さらに彼は長い日本滞在中に、実在のドゥーフ同様、日蘭の辞書を作成したとされる。

通訳や翻訳以外にも様々な種類の仲介行為が本書で確認できる。まずは交易の斡旋である。ヤコブは個人売買用に、当時の日本で梅毒薬として知られていた水銀をかなり所有していた。抜け目のない料理人アリ・フローテは、その水銀をエノモト僧正に売るようヤコブに勧め、仲介料をせしめようとする。仲介行為は恋愛関係に対しても行われる。小説ではオリトに淡い恋心を抱くヤコブが描かれている。そんなヤコブに対し、コミカルな斡旋行為をするのはマリヌスである。ヤコブは音楽愛好家のマリヌスにスカルラッティの楽譜を贈与し、その代わりにオリトと会話する時間を作ってくれるよう、彼と交渉する。ところが会話はできたものの、その直後、彼はオリトを含む医学生のために腸重積の治療法の実験台にされ、肛門から煙浣腸を施される羽目になるのである。ヤコブの恋の仲介者としてもう一人、ウザエモンがいる。オリトとの結婚を養父に反対されたウザエモンは、オガワ家の利益となる結婚をした。それを知らないヤコブは、手紙を挟んだオランダ語の辞書をオリトへ渡してくれるようにウザエモンに頼んだ。ところがその後まもなく、エノモトによって彼女はシラヌイ僧院へ連れ去られ、ウザエモ

ンの仲介行為は実を結ばないまま終わった。

こうした仲介行為は必ずしも両者に平等・公正なものではなく、仲介者の立ち位置によっては悪意ある仲介になったりもする。オランダと日本の交易においても双方の騙し合いが見られる。フォルステンボース商館長は、バタヴィアの硬貨造りに必要な銅の輸出量が年々削減されていることを憂慮していた。そこで彼は、銅の割り当ての増量がなければ出島から撤退するという東インド会社総督の手紙を偽造し、ヤコブに偽の署名をさせた。仲介行為に関わった二人は当初は同じ側（オランダ東インド会社）に属していたはずだったが、フォルステンボースは銅の増量分を自分名義に書き換え、結局ヤコブだけが偽造の罪を被ることになるのである。

日本側にも仲介における騙しは見られる。江戸からの返信は通詞により翻訳されて読み上げられたが、それには銅の増量要求への回答がなされないどころか、逆に孔雀の羽毛の扇「千」本が要求される内容だった。その書状の漢字を目にしたヤコブは、自分の失敗談を持ち出しながら巧みに漢字の「千」と「百」と「一」の意味を尋ねた。通詞の説明を受けた彼は、江戸からの要求（書状の文字）は扇「千」本ではなく「百」本ではないかと問い質し、騙しを暴いたのである。

『千の秋』には完全にでっちあげられた仲介行為も存在する。シラヌイ僧院では毎月選ばれた尼僧に僧と儀式的性行為をさせていた。尼僧たちは、生まれた赤子は里子に出されて幸せに暮らし、自分の奉公期間が終われば下界で我が子に再会できると信じこまされていた。そして真実味を出すために、シラヌイの僧たちは里子からの手紙を偽装し続けていたのである。

混淆する人種とポリフォニックな語り

オランダは鎖国中の日本にとって唯一の正式な貿易国だった。ヨーロッパ諸国が世界を股にかけて行なった植民、交易からみてとれるように、16世紀以降のヨーロッパはナショナリズムで動いていた。一方、オランダ東インド会社から出島にやってくるのは、実に様々な国籍を持つ様々な人種の集まりだった。そもそもジャワ島に拠点を置いている東インド会社には、ジャワ人やマレー人をはじめ、プロイセン（ドイツ）人やアイルランド人、あるいはそれらの混血がいた。従って、出島住人の間では、オランダ語と日本語のみならず、マレー語や英語、ときにはフランス語も飛び交い、さらには武士階級が使う特殊な日本語なども混在する多言語社会だったのである。

『千の秋』の特徴の一つに、出島の住人たちの自分語りがある。損得に抜け目のないアリ・フローテは甘言に釣られ、船に監禁されて働かされたこと、ジャワ人の孤児イファ・オーストオーストは東インドで聖イファ（イヴ）の日に見つけられたという名前の由来や孤児院から脱走して船に乗り込んだこと、マリヌス医師は遠縁の資産家だった叔母の元で育てられ医学で身をたてることになったが、庭師から学んだ植物学への関心をいまなお持ち続けていること、人種差別者の上級事務員フィッシャーは南米スリナムで逃亡奴隷を一掃する任務中に捕まり、テーブルに串刺しになりながらも命からがら逃げたことなど、彼らは人種や地位に関係なく自分語りをす

る。ここで特に注目したいのは奴隷ウェーの語りである。読み書きができればウェーは事務員の補助ができるだろうというマリヌス医師の進言によって、ヤコブが彼を教えることになった。他の住民たちの語りと違うのは、ウェーの語りには聞き手がいないことである。彼は自分の名前が持ち主によって何度も変えられたと語り、何が自分のもので何が奴隷所有者のものなのかを問い続け、自分の存在について考えていく。

この小説には薬草売りのタネの一人語りとオリトを慕う尼僧ヤオイの語りも含まれている。主筋に関係のないこれらの雑多な語りを『千の秋』の問題点として挙げている批評家もいる。

様々な声の混乱、入り組んだ散文と語りの複雑さがあるからには、同様に複合した物語が必要だと自分は思う。しかしこの小説にはそういうものはない。だから読んでいると冗長でいらいらさせられる。(Kevin from Canada)

確かにこうした自分語り自己語りが小説のストーリーに直接関わっているわけではなく、「冗長でいらさせられる」という指摘もうなずける。しかしその一方で、人種、階級、性別に関わらず、彼らが主体的に語る対等の人間であることを示しているという意味では、雑多な語りの存在そのものが『千の秋』の重要なメッセージとなっているのも事実である。例えば、奴隷の身分が自分自身のあらゆる所有権をはく奪されたとしても、記憶だけは自分のものだというウェーの言葉は重い。記憶語りはまさに個人の存在(アイデンティティ)の証である。自立した語りの主体になること、言い換えれば、語られる存在ではなく、語る存在になることにより、「サルタン」であるウェーを含め、語り手は支配者側の統制を逃れているのである。

仲介者ヤコブ

ヤコブは二つの重要な出来事の仲介者となっている。一つはイギリス船の出島への侵入による紛争の実質上の仲介役を果たしたこと、もう一つは、シラヌイ神社における女たちを性の搾取から解放したことである。経済的に困窮している長崎奉行はイギリスによる出島攻撃に対し、全く無力だった。ヨーロッパでの勢力を増しつつあるイギリスは、武力で出島を制覇し日本との貿易を要求してきたが、このような西洋流の支配・被支配の論理は出島では通用しなかった。結局、身体を張ったヤコブの仲介行為——物見やぐらに立ちイギリスの砲撃を見続ける——によって、イギリス船は突如退去し、事態終息に至った。イギリスの侵略を防御しえたことは、結果的には出島の幽閉と日本の鎖国をさらに持続させていくことになるのである。

ヤコブがエノモト僧正のカルト集団を解体するために果たした役割は、秘密教義を記した巻物の運搬という仲介役である。シラヌイの僧ジリツが禁を犯して書き記した教義は、いわば内部告発といえるものだった。ジリツから巻物を託されたタネは、オリトと恋仲だったウザエモンの元へそれを届けた。そしてウザエモンはオリト救出に旅立つ前、安全を期してヤコブに預けた。フィーバス事件後、ヤコブは半年かけて訳読してカルト集団の実態を把握すると、巻物

をシロヤマ奉行に渡して判断を委ねたのである。

人から人へと手渡しされる巻物の移動に象徴されるのは、知識の伝搬の様子である。かつてオリトは産婆として自分の役目は、無知のために出産で亡くなる母親を少なくすることだとヤコブに語った。彼女は川を渡るための橋を作るという比喩を用いて、「無知から知識へと渡る橋を作りたい」と説明した(72)。言い換えれば、知識を持つ者がさらに次の者に知識を伝えていくというように、知識を次々に仲介していくことが必要だと語ったのである。ヤコブへ届けられた巻物はまさしくその一例だと言えよう。シラスイの女たちは無知のために性(性行為と出産)と赤子と自らの生命を搾取されていた。巻物は知識であり、それを伝播するための橋とは幾人もの仲介人だったのである。

仲介する英語

英語で日本を描いたトランス・ナショナルな文学と言え、カズオ・イシグロの『遠い山なみ』や『浮世の画家』、ミッチェルの『ナンバー9ドリーム』などに先例が見られる。これらの小説の登場人物は日本人、舞台のほとんども日本であり、日本語訳を読めば日本の小説として通ってしまいそうである。他方、『千の秋』では異文化の相違が前景化されている。その一例が暦の表示方法である。オランダ商館やフィーバス号船上が中心場面となるときには西洋暦、奉行所やシラスイ僧院が中心となるときには日本暦(陰暦)とが使い分けられている。ただし気になるのは、この小説の中心はオランダと日本との遭遇が扱われたオランダ語と日本語の世界であること、そしてイギリスがオランダにとっても日本にとっても「敵国」として描かれている点である。イギリス人作家による英語文学作品におけるイギリスのこうした扱い方をどう解釈したらよいのだろうか。

その鍵となるのがフィーバス号艦長ペンハリガンの語りである。この語りを通してイギリス人のペンハリガンは、血肉を持った一人の人間として読者の前に立ち現れていく。すなわち「敵」として一括りされて語られる存在ではなく、語る存在となることで主体の人間として相対化されるのである。彼は首尾よく日本と貿易を締結し本国に帰った後の栄誉を望むような野心家であるが、他方で痛風に悶え苦しみながら、部下からの憐れみには過剰反応を示すような自意識過剰で滑稽な人間として描かれている。商館の引き渡しが拒絶されたため、ペンハリガンは出島に二度大砲を放った後、物見やぐらに立ち続けるヤコブとマリヌスへ命中止させるため、カロネード砲の射撃を命じた。ところが彼は発射直前に射撃を中断させ、長崎から撤退した。実はペンハリガンの語りの中で、彼は一人息子トリストラムが銃撃戦に最後まで留まって戦死したことを思い出している。ヤコブの赤毛と彼の勇気ある行為に同じく赤毛のトリストラムの面影を重ねたペンハリガンは、発射の合図を出す瞬間、一人の父となったのだ(461)。すなわちペンハリガンに自分語りをさせることにより、イギリスという国家から国籍に無関係な個人へと焦点をシフトさせ、偏狭なナショナリズムを脱ぎ捨てた一人の人間に戻しているのである⁹。しかし、彼の語りは読者のみが知るところであり、射撃の中断とイギリス船の撤退はヤコブら

には謎のまま終わる¹⁰。興味深いのは、二人の直接の交流がないにもかかわらず、ヤコブが帰途に就く18年後、彼がペンハリガンに親近感を抱いていることである(507)。

『千の秋』というポストコロニアル小説は、読者に英語使用への違和感を覚えさせながら、英語を特権言語というのではなく、異文化間の関係性をつくり交流するために必要な仲介言語であることを再確認させてくれる。ペンハリガンの語りと読者の仲介がなければ、二人の間接的な交流・関係が存在し得ることはあり得ないのである。

注

1. www.telegraph.co.uk/culture/books/bookreviews (2010.5.18) を参照。
2. 『千の秋』をポストコロニアルな歴史主義から分析するゲアード・バイアーは、文化的な差(異国趣味)の描写にはロマンティックな要素がつきものになることを指摘し、ミッチェルが描く「植民地主義者の言説の亡霊」を味わうためには、政治的な「カニバリズム」を「文化的他者と西洋との特別な関わり方についての超歴史的なコメント」として読む必要があると語っている(Bayer 115)。
3. クレール・ラルソネールとエレヌ・マチナルは『千の秋』において「仲介」が中心的テーマだとして、「科学」と「翻訳」に限って論じているが、ポストコロニアリズムと関連づけてはいない。
4. オランダ東インド会社(Verenigde Oost-Indische Compagnie, VOC)。世界で初めての株式会社がアムステルダムを本拠地として、1602年3月設立された。1619年、アジア最大の拠点がインドネシアのバタヴィア(現ジャカルタ)に置かれる。1609年に開設された平戸のオランダ商館は、1641年に出島に移転。英蘭戦争で帝国の覇権をイギリスに譲り、その後、フランス革命軍にオランダが占拠され、1799年12月に東インド会社は解散した。バタヴィアはイギリスに占領されるが、ナポレオン没落後の1814年、オランダが再びバタヴィアにおける東インド領の権利を取り戻した。
5. 『クラウド・アトラス』のファブリカント(人造人間)も12年後に自由になると信じ込まされているが、実際には殺され、ソーブという食用原料にされる。セアラ・ディロンはミッチェル作品には「隷属」のモチーフが繰り返されていることを指摘している(Dillon 12)。
6. ミッチェルが出島を訪れたことについては、www.telegraph.co.uk/culture/books/bookreviews 参照。
7. ケンベルが1715年に亡くなった後、イギリスの博物学者のハンス・スローン卿(Hans Sloane)がケンベルの甥から草稿などを購入し、助手のヨハン・カスパー・ショイヒツァー(Johann Caspar Scheuchzer)に英訳させた(*History of Japan*, 1727)。ちなみに、スローン卿のコレクションが核となって大英博物館が造られた。
8. 本稿で「オランダ人」はオランダ国籍の人だけでなく、とくに日本人と対比する場合、国籍、出身に関わらず、オランダ東インド会社からやって来た人を指す。

9. フィーバス号が退去した後に海岸で混血の外国人水夫の水死体が発見され、ヤコブは役人からイギリス人かどうかの確認を求められた。イギリス人なら溝に捨てられ、そうでなければ外国人墓地に埋葬されると言う。イギリス人と黒人の混血らしい遺体を見たヤコブは、国籍にこだわる役人に対し、「イギリス人ではない」と答えている (474-75)。
10. ちなみにドゥーフの『日本回想録』にはフェートン号事件 (1808) のペリュ船長の声はないが、この事件がきっかけで通詞は英語 (英学) も学ぶことになった。1809年2月に幕府は長崎の通詞6名に英学を学ぶよう、さらに10月には通詞全員にロシア語と英語を修学するよう命じた。ドゥーフの後任のプロンホフ館長が英語の指導をした。
(『薩摩と西欧文明』59)。

使用文献

- Atwood, Margaret. *The Handmaid's Tale*. Fawcett Crest, 1986.
- Bayer, Gerd. "Cannibalising the Other: David Mitchell's *The Thousand Autumns of Jacob de Zoet* and the Incorporation of 'Exotic' Past." *Exoticizing the Past in Contemporary Neo-Historical Fiction*, edited by Elodie Rousselot, Palgrave, Macmillan, 2014, pp. 103-119.
- Begley, Adam. "Interview: The Art of Fiction No. 204." *The Paris Review*, vol. 52, 2010, pp. 169-200.
- Beville, Maria. "Getting Past the 'Post-': History and Time in the Fiction of David Mitchell." (*Dis*) *placements*, vol.1, no.6, Dec. 2015, pp.1-17.
- Dillon, Sarah. "Introducing David Mitchell's Universe: A Twenty-first Century House of Fiction." *David Mitchell: Critical Essays*, edited by Sarah Dillon, Gylphi, 2011, pp. 3-23.
- Doeff, Hendrik. *Recollections of Japan*. Translated by Annick M. Doeff, Trafford, 2003.
- Ishiguro, Kazuo. *A Pale View of Hills*. 1982. Faber and Faber, 2009.
- An Artist of the Floating World*. 1986. Faber and Faber, 2005.
- Kaempfer, Engelbert. *Kaempfer's Japan: Tokugawa Culture Observed*. Translated and annotated by Beatrice M. Bodart-Bailey, Univ of Hawaii, 1998.
- Kevin from Canada. <https://kevinfromcanada.wordpress.com/2010/07/28/the-thousand-autumns-of-jacob-de-zoet-by-david-mitchell/>
- Larsonneur, Claire. "Revisiting Dejima (Japan): from Recollections to Fiction in David Mitchell's *The Thousand Autumns of Jacob de Zoet* (2010)." *SubStance#136*, vol. 44, no. 1, 2015, pp. 136-147.
- and Hélène Machinal. "Mediations: Science and Translation in *The Thousand Autumns of Jacob de Zoet* by David Mitchell." *Études britanniques contemporaines*, vol. 45, 2013, pp. 1-6.
- Mitchell, David. *number9dream*. Random House, 2002.

-----, *Cloud Atlas*. Sceptre, 2004.

-----, *The Thousand Autumns of Jacob de Zoet*. Random House, 2011.

Reynolds, Matthew. "Small Island." *London Review of Books*, vol. 32, no. 11, June, 2010, pp.

23-24. Reprinted in *Contemporary Literary Criticism*, edited by Jeffrey W. Hunter,

Detroit, MI: *Literature Resource Center*, vol. 311.

ザビエル渡来 450 周年記念シンポジウム委員会編 『薩摩と西欧文明——ザビエルそして洋学、留学生』 南方新社、2000.

ドゥーフ、H 『日本回想録』 永積洋子訳、雄松堂、2003.